

『現代若者研究』メルマガ版

【第5回：時代を牽引する若者とは】

2021年11月



『現代若者研究』メルマガ版の試み

ハイライフ研究所では昨年度まで、大学生～20代社会人を研究してきた。

公益財団法人ハイライフ研究所では、2019年度に大学生を対象に研究を行い、引き続き2020年度に20代社会人を対象に研究をおこなっています。その詳細は、2冊の報告書としてすでに公開しております。

しかし、私たちハイライフ研究所の若者に対する関心はまだまだ尽きることがありません。そこで、メルマガの形で研究を深めていくことにいたしました。メルマガ発信に際しては、以下を心がけてまいります。

そして、ハイライフ研究所ホームページにアーカイブしてまいります。

メルマガ版での試み その一

過去に発表した報告書で伝えきれていない部分を伝えていく。

メルマガ版での試み その二

若者に関して、新たに沸き起こる興味を紐解いていく。

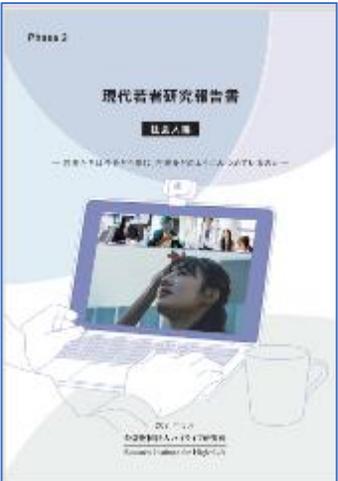
メルマガ版での試み その三

読みやすく、楽しく、面白く、伝えていく。

なお、内容にご興味をお持ちになった方は、是非とも報告書本体もご参照ください。

※[ハイライフ研究所ホームページ](#)にてご覧いただけます。

(下記報告書の表紙をクリックしていただくと、各報告書 pdf.にジャンプいたします)



第5回のテーマは、 時代を牽引する若者とは？

クラスター分析で、根底に同質の特性をもちながらも、
20代社会人がいくつかのタイプに分かれることが確認できた。

では、これからの時代を担うような若者とは
どのような人たちなのだろうか？

そこで、少し尖っている若者たち数人に
インタビューをおこなった。

※「尖っている」とはあくまでも私たちの感覚的なものです。

まずは、時代を切り拓くことを予感させる
一人の若者の姿をご紹介します。

※今回の内容は、ランダムにお聞きしたお話を、ハイライフ研究所で構成し、
まとめております。

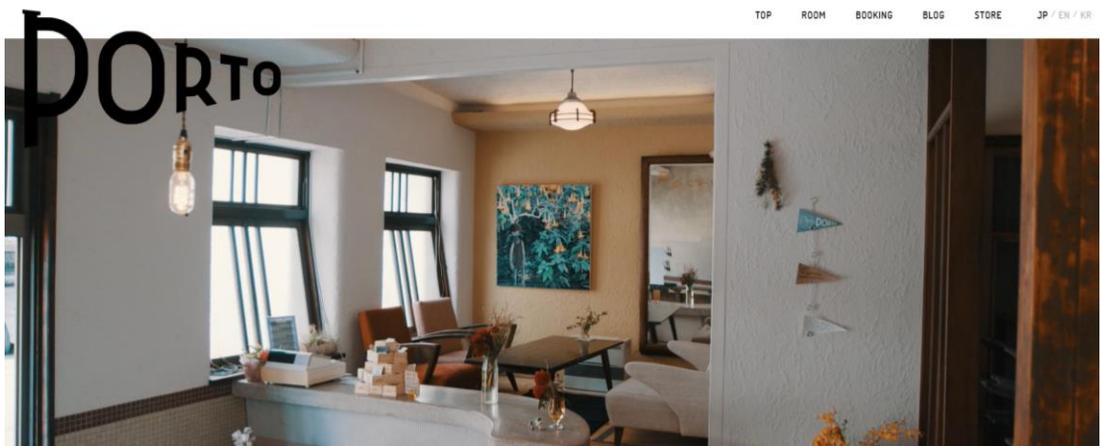
使用データ

【パーソナルインタビュー調査】

- 目的:これからの時代を牽引していくであろう若者像を捉え、
彼らのキーとなる構成要素を見つけ出す。
- 手法:オンラインでのパーソナルインタビュー調査 ※1ケースにつき1.5h~2.0h
- 対象者条件:20代~30代前半 男女
- 調査数: 男性5ケース 女性4ケース
- 実査時期:2021年9月



- 1989年 北九州市門司区生まれ
- 北九州大学・国際関係学科卒 大学では、絶対的貧困国や紛争地域の子どもたちがどうしたら幸せになれるかなど、途上国開発を学ぶ。
- 卒業後、環境関連やマーケティングリサーチの仕事を経て、2018年に阿蘇で合同会社阿蘇人、地元門司港で合同会社ポルトを設立。
- クラウドファンディングを活用して門司港にオープンしたゲストハウス「PORTO」を皮切りに、地元門司港で飲食店やメディア運営も行っている。
- 今年から北九州市のオンライン移住相談員となり、移住促進を含めて北九州市の魅力を発信している。



ポルトに関する情報は以下から

<https://moji-porto.com/>

✓ 大真面目に、世界中の人が皆幸せに暮らせるような社会をつくるために、仕事をしている。

こんな風に考えるようになった背景には、小4でスティーブンス・ジョンソン症候群という難病にかかり、入院していた経験があると思います。僕の場合は原因がよくわからなく、失明するかもしれないと言われていました。当時はどんどん症状が重くなり、夜寝て朝起きても幸せな翌朝が来ない、明日になるのがコワイという体験をしたのです。親にこんな体に生まれて辛いと言ったら、世の中にはもっと大変な思いをしている子どもたちがいると言われて、いろいろ調べてみたら確かに自分と同じ位の子どもたちがもっと辛い暮らしをしていることを知りました。その難病の体験が原体験としてあり、世界から理不尽な思いをしている人をなくしたいという思いが芽生えたのです。

普通は朝起きたら幸せだろうと確信していますが、世の中には明日に確信が持てない人がいる。**明日に絶望する人のいない世界にしたいと思っています。**

ここ4~5年、命を懸けている感覚があります。世界と自分の境界線がなくなって、自分がなくなっていくような感覚。生活者は皆自己を幸せにするために生きているのだと思います。もちろん自分にもそういう気持ちもありますが、僕は**自分を喜ばせることと世界を喜ばせることが重なるような境地になれば**と思っています。

✓ 理想に近づくためには、会社(=小さな社会)という枠組みで実験をすることが必要だった。だから、起業した。

高校生のころからNGOを立ち上げたいと思っていたのですが、当時はどうしていいかわからなかったし、糸口もつかめなかった。今は世界を良くしていく手法について仮説を持っています。

2年ほど前に、門司港の文化資本(遊郭建築)を私財を投げ打って買い、残したいと考えている人と出会いました。そこを何とか宿泊施設として利用できないかという相談を受けて、ゲストハウスにしたのがポルトです。ポルト(イタリア語で港)という名前には、多様な人が集う、新しいことを生む、文化資本を増やすという思いを込めています。

ゲストハウスポルトを始めるのにあたって、預金額6千円の通帳をもって500万円を銀行に借りに行きました。こんなにお金を持っていなくてお金を借りに来た人は初めてだとめっちゃ笑われましたが、その**銀行の担当者が面白いと思ってくれて、なんと融資してくれました。**2千万円まで融資してくれるとまで言ってくれたのです。菊池君はどんどん面白ことをやりなさいと言ってくれました。

今は会社という手段を使って、いろいろ実験しているところです。会社にしてあげば**次の世代につなげていきやすい**です。単なる活動レベルだと残しにくいと思います。

✓ これからの時代の幸せな働き方とは？ 地域との繋がりの中で、お金では得られない幸せを感じながら働くこと。

不安を煽るのが今の世の中で、まっとうな事業をしていればそんなに儲かるはずがないと考えています。自分の会社のスタッフの給料は自分も含め決して高くないですが、地域に根差して、皆幸せそうな顔をして働いています。例えば、近所の高齢者の方がゴハンをくれたり、高齢者の方に何かあったときには助けるというようなゆるやかな繋がりが機能しています。スタッフたちは、こういった近隣との貸し借りや助け合いという心持ちで働くことで幸せそうですし、不安を感じないで済みます。会社には独身の女性スタッフが多いのですが、結婚して誰かに依存しなくても暮らしていけるという安心感があるのです。地域の中に根差して働くということも、実験したいことのひとつです。

近辺には馴染の食堂や喫茶店が残っていて居心地の良さを感じます。スタッフや自分に余ったものを分けてくれるようなやさしさがある。天ぷら屋のおじちゃんや夜まで働いているスタッフに残った天ぷらを分けてくれたりする。そういう空間は善意で成り立っていて、決して儲かっているわけではないのです。人々の生活を豊かにしてくれる町の定食屋のような小さなお店は儲かっていません。そういうお店は次の世代には消失していく。でも、町の中にも幸福度を上げる福利厚生として必要とされるお店があると思っています。そういう事業を引き継ぐ余力を持っていたいと思っています。

✓ お金がなくても生きていけることを知っているし、お金持ちになろうとも思わない。

7人兄弟の6男。父親は印鑑を彫る職人で家は貧乏でした。親に「自分たちで何とかしろ」と言われて育ってきて、小さいときから創意工夫をし、お金がなくても戦略的にうまく切り抜ける方法を身に付けてきました。上の兄から順に育って家にお金を入れていき、その仕送りで弟たちを育てていく。兄弟皆思いやりがあります。兄弟やその友達という多くの子どもの集団の中で育ってきて、寂しい思いをしたことはありません。人に恵まれていたと思います。

もともと貧乏なので、お金がなくても生きていけることを体感していました。自分の生存に関わるコストはわかっています。生きていだけなら週1日労働すれば何とかなると思っています。後の6日は他のことができるのです。

お金を稼ぐことに興味がありません。お金で買えるものと買えないものがあると理解しています。お金には換算できない価値もあるのです。菊池君面白いねと言われて、仕事が進むことがあります。お金に頼るより、そういう人間であるほうが良いと思っています。

都市の暮らし方のほうが豊かだということになってはいますが、幸福の指標はお金だけではないと思っています。もちろん、お金が豊かさをもたらすこともあります。そうではないときもあると考えています。多様な考え方が必要だと思います。

✓ **自分たちはポスト資本主義の第一世代だと感じている。**
次のあり方を探している。

今の若い世代はお金を欲しがりません。高い車も欲しがりません。もちろん中には貧困な人もいますが、僕のような苦学生はそれほどいないと思います。基本、親に買ってもらえるし、欲しいものはお金で手に入れてきています。

世の中、**一回お金持ちになってみたが、幸せになれなかった**ということだと思います。今まさに次のあり方を探している。親世代も戦後直後の生まれというわけではないから、それ程貧しくない世代。でも、**子ども世代には親の生き方も幸せそうには見えていない**のだと思います。

社会通念上、皆働かなくてはならない。親に就職先をきちんとしろと言われても、若者たちは心の奥底でそうは思っていないんです。親を見ていてもそれが正解だとは思えないし、お金で幸せは買えるとも思っていない。**若者たちは激動の時代に生きている**と感じています。その不一致が若者を苦しめている。大企業に入れば幸せになれるという宗教を親に押し付けられますが、今の子どもたちはそんなことは信じられないのです。親の会社が安定していないことも見えていたりします。一方で、若者は親に絶対に反対する根拠も持っていないのです。

✓ **“顔が見える経済”という実験。ひいては、多くの人に幸せをもたらす仕組みがつくれるか？**

使い手(買い手)から**作り手を遠ざけたことの弊害**が今起きているのだと思います。僕が今着ている無印、また、ユニクロはアジアを生産拠点としています。安くいいものを買いたいという買い手とそんなに働きたいとは思っていない働き手をマッチングさせるのが“仕事”だと思います。ですから、普通に事業をしたら儲からないはず。資本家が儲かり、労働者が搾取されるというのが今の資本主義の仕組みになっていると思います。

仕組みやルールや商品も、顔が見えることが大事だと考えています。例えば、モノも作った人の顔が見えないから粗末に扱ってしまう。搾取も起きる。

自分の会社は会計も、従業員にオープンにしています。会社が健やかに育っていると思います。**“顔が見える”経済にすれば、儲からなくても持続的に続けられるか**ということを実験をしています。

今考える頂点は、多くの人を幸せにする仕組みやルールを作ることです。生きているうちに、絶対に作り終わらないと思いますが、日本型のシステムを作って、これから高齢化を迎える**中国・インドなどアジアに広げ、ローカライズ**することも考えています。僕の実験の足跡を次の世代がローカライズできればいいと思っています。

✓ 生まれ故郷の門司港に可能性を感じている。門司港モデルをつかって、広めたい。

地元門司港の暮らし方が好きです。顔が見える経済(作る人、届ける人、買う人の顔が見える経済)が土台にあります。もともと組合意識が強く、三方よし経済という土地柄です。お互い商売で町の人に支えられているから、お金を内部循環させるという考え方は。自分の親の場合も、値段が高くても、遠くの家電量販店ではなく地元の電気屋さんで買います。町の人が印鑑を買ってくれるお客さんですから。

生まれ故郷の門司港に可能性を感じています。日本で一番最初に発展して急激に衰退した町なのです。都市としての機能を失った町をどう持続させていくか、再生や創生ではなく、そもそも町はつくるものではないと思っています。人の暮らしがあって地域は成り立っているのです。その地域特有の文化や個性を大切にしたいと思っています。門司港では都市型の実験をしています。

政府や行政がやっている産業振興にはあまり意味がないと感じています。特に観光振興では豊かになりません。外資が儲かるだけ。結局、高齢化が止まらないし、人口も流出し、産業が育たない。自分が門司港に戻って若干若い人が増えている程度。政府や行政のお金の分配の仕方が間違っていると感じます。

実験しながら、再現性のある門司港モデルを作りたいと思っています。

✓ 九州や四国は次世代への可能性を秘めている。ここから、変革を起こしたい。

一番最初の起業は阿蘇で、移住者マッチングをしました。阿蘇にはそもそも持続可能な暮らし方を脈々としている人たちがいます。震災の復興でも、旅館や農家の人などそこの人達はいつも100年先の孫の代の話をするのです。マーケティングの世界では1~3年くらいのサイクルでしか考えませんが、阿蘇の人たちは100年先の集落の将来を見えています。そこでの時間軸の長い暮らし方に惹かれました。

八女にも「うなぎの寝床」ということをやっている思想家のような変な人がいます。面白い人がそこにいるか、どうか。地域の活性化は人に依存しています。そういう人を輩出できるかどうかにかかっています。

高知の梅原真さんという一次産業のデザイナーには共感しています。地域に根差してマーケティングやクリエイティブの力で変えていこうとしています。

上勝町(ゴミゼロ運動)などは、もう少し尖ってサステナビリティに特化してます。

九州や四国は可能性を秘めていると感じています。幕末のように、九州や四国から新しい日本の動きが生まれるのではないかと感じています。

九州には横のつながりがあるので、ゆるやかな連合体を作ろうと思っています。1年以内には団体を作って、3年後に事業化するつもりです。

✓ 好奇心が強く、“なぜ”を考える子どもだった。そこに、難病と言う試練が掛け合わさって、自己と向き合うようになった。

そもそも、“なぜ”という問いかけが多い子どもでした。子どもの時から、“なぜ”が納得できないと動けない面倒くさい子でした。

病気がきっかけになって、さらに内省的になりました。自己の存在意義は何なのか、世界に対して投げかけるようになりました。自分と対話している時間が長いです。

生きやすくないですし、あまり幸せを感じたことがないです。今もこの瞬間にも不条理に苦しんでいる人がいると思うと心の底からは幸せを感じられません。その使命がないと生きていけないのです。周りの人が幸せそうなら嬉しいと感じます。それが、僕の原動力になっています。

仕事と活動、プライベートの垣根はありません。仕事＝お金とは考えません。仕事＝自分のやりたいことに近いかどうか。

革命戦士の気持ちに近いです。異端感を感じます。周りからは異端と思われるだろうと思います。理論派のロマンティストとスタッフからは言われます。

世界を動かした人に興味があります。こういう人たちはお金を稼ぐことに興味がありません。吉田松蔭、高杉晋作、ガンジー、門司出身の出光佐三……

✓ コロナ、地方ならではの悩みなど、うまくいかないこともあるのが現状。

今の満足度は10点満点中5点。宿泊・飲食が中心の事業なので、コロナの影響で会社を軌道に乗せられていないからです。コロナは自分の思想にとっては追い風ですが、会社にとっては逆風。自分がマーケティングなど新規事業開発の仕事をして売上を立てています。僕が属人的に稼ぐことで、会社を存続させている状態です。社会実験として会社をつくったとはいえ、機能していない状態。イレギュラーなことが起きても、会社は自分がいなくても回る仕組みでないといけないのですが。

観光がダメになっておばちゃん達の雇用が失われています。新しい事業を作り続けて、新しい雇用を生もうとしていますが、地元の企業から資金協力をなかなか得られていません。40～50代の2代目、3代目経営者のような人からは支援されにくいのが現状です。彼らの意識が地域に向くの待つか、自分をもっと強い影響力をもって説得力をもつか。

また、地域の場合、面白い人がいても、周囲の人になかなか理解してもらえないという課題があります。地域では、面白い人を許容できる教養がないと感じます。自分がこれだけ身を削って必死になってやっても、地域の大人は理解できない。そこが東京のような都市との違いです。都市のように教養がある人がいれば、資金協力も得やすいと思っています。

ちょっと考察・・・

菊池さんのお話を聞いて、その思考力、行動力に加え、熱い思いに圧倒される感があった。とにかくお話を聞いて面白く、人を引き付ける魅力のある方だった。

菊池さんは、これまで私たちが抱いていた若者のイメージをくつがえす存在だ。もちろん、こういった方が多数派だとは思わないが、これからの時代を担う若者は確実に存在し、着々と行動を起こしているのだ。彼らが担う時代は、きっと今より生きやすくなっているはずだ。そうなることを心から願っている。

菊池さんのお話を聞いて、時代を牽引する若者を括るキーワードを考えてみた。

キーワード1

自分の中に、他者の存在も含んでいる。その視点で考える。
〈他者のためという気持ち〉

キーワード2

自分自身と向き合って考え抜き、自分の答えを導き出す。
〈哲学する力〉

キーワード3

自分の生活ぐらい何とかできるという生命力に溢れている。
〈生き抜いていけるという自信〉

キーワード4

地元や好きな地域を何とかしたいという地域愛がある。
〈自分が基盤とする地域への思い〉

キーワード5

モデルがなくても、自分で新しい道筋を作り出そうとする。
〈自分が変えていこうという気概〉

キーワード6

お金で得られるモノ、コトの限界を知っている。
〈お金中心ではない新しい幸福観〉

キーワード7

新しい動きをする彼らに金融・企業・行政などが理解を示さないと活発な活動へと発展しない。
〈彼らを支援する大人社会〉